

愛した分だけ死に近づく。

大林宣彦監督作品

風間杜夫・秋吉久美子

片岡鶴太郎

永島敏行

名取裕子

原作：山田太一（第1回山田太一朗読会賞・新潮社刊） 脚色：市川森一

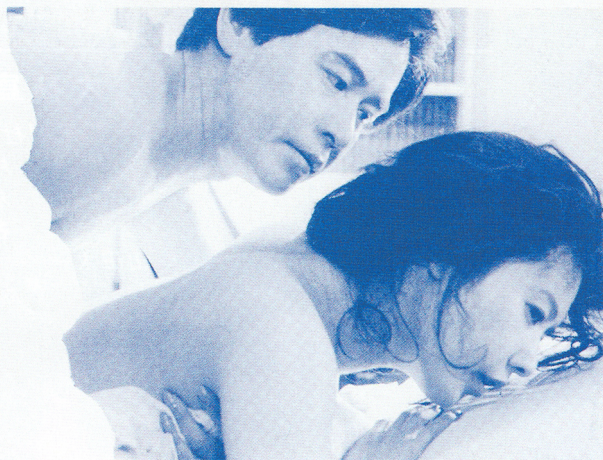
製作：杉崎重美／プロデューサー：樋口清／撮影：阪本善尚／美術：藤谷和夫／音楽：篠崎正嗣

異人たちの夏

いじん なつ



異人たちの夏



■スタッフ

製作………杉崎 重美
プロデューサー……樋口 清
原作………山田 太一
（新潮社刊・第一回山本周五郎賞受賞作品）
脚本………市川 森一
監督………大林 宣彦
撮影………阪本 善尚
美術………薩谷 和夫
音楽………篠崎 正嗣

■キャスト

原田 英雄……………風間 杜夫
原田 房子……………秋吉久美子
原田 英吉……………片岡鶴太郎
間宮 一郎……………永島 敏行
藤野 桂……………名取 裕子
今村 綾子（声）……入江 若葉
落語 家……………桂 米丸
齒科 医……………笹野 高史
タクシー運転手……ベンガル
川田 淳子……………川田あつ子

■かいつ

「僕が愛した人は、異人^光だった。」
潤わききった現代人の生活に、そつと忍び込んでくる孤独と幻想。おとし話といつて笑っていられない不思議な時間と非現実な空間。
（山田太一・市川森一・大林宣彦）が、異色の世界を切り拓きます。

妻子と別れ、孤独な日々を送るシナリオ・ライターは、生まれ育った浅草の町で、幼い頃に死に別れた若い父母とそっくりな二人と出逢った。

こみあげてくる懐かしさに身を任せつづけ、不思議な体験に激しく揺さぶられる主人公。しかし、美しい恋人ケイは、もう決して彼らと逢わないでと迫った。

いったい何が起きているのか。

静かな夏の夜、窓に二つの灯がゆらめく――。

第1回山本周五郎賞受賞の山田太一が、いつもの斬新なテレビドラマとも異なり、大人の愛の世界を幻想的に、哀切に描いた話題の長編小説を原作にして、原作者ご指名のシナリオ・ライター、市川森一が初めて映画の脚本を手懸け、「映像の魔術師」と呼び声高い大林宣彦が、演出を担当します。

この三人の期待に応えるキャストとして、主な舞台となる浅草に因縁めいたものを感じるといふ風間杜夫、監督から妖しい童女のような母親をとの注文を受ける秋吉久美子をはじめとして、初めて死びとを演じる名取裕子、映画初出演の片岡鶴太郎、そして俳優として演技の幅を広げている永島敏行が顔を揃えています。

下町・浅草での、異人である父母とのひとときの心のふれあいと、寂寥とした街中の異人である恋人との異常なセックス。現代に「やさしさ」を追い求めつづける貴女に送る、この秋一番の話題作です。ご期待下さい。

■ものがたり

離婚し、妻子と別れたシナリオライターの原田は、以前から仕事場として使っていた環状8号線ぞいのマンションに住んでいた。

ここは小さなオフィスが多く、夜間の住人は自分一人だと思っていた。しかし、ケイと名乗る30歳前後の女が3階に住んでいることを知り、やがて二人は深い関係を持つようになる。

ある日、原田は幼い時を過ごした浅草にふらつと足を向け、演芸場でひどく気になる男と出会った。彼は誘われるまま、その男のアパートまで行ってしまう。

そこには、男の妻もいた――。

気になる男と妻、それは原田が12歳の時に死別した父と母だった。父も母も、事故で死んだ時の年齢のままで、今の原田よりも若い。しかし、この世の人ではない。異人^光である父も母も、原田が12歳の少年のままであるかのように接した。



非現実の世界と時間への恐怖よりも、懐かしい安らぎを、原田は感じるのだった。

浅草へ足を運ぶ回数が増えるようになると、彼のまわりの人間から、どこか体に異常があるのではと心配されるほど衰弱しはじめた。原田自身は全く自覚がなかった。

問いつめられて、ケイに浅草行きの秘密を打ち明けると、ケイはその関係を断つことを激しく迫った。

原田は「両親」と別れる決心をした。3人は別れの小宴を開いた。父も母も料理を口にするこなく、名残を惜しみながら消滅していった。

「両親」と別れたあとも、原田の衰弱は止まらなかった。原因はケイにあった。

やがて、ケイとの別れの日もやってきた。

ケイとの最初の出会いは、彼女が原田の部屋にシャンパンのボトルを持って一緒に飲もうと、訪ねてきた夜だった。その直前に仕事の仲間のテレビプロデューサー・間宮が訪ねてきて、別れた妻の綾子と間宮との交際を告げられたばかりだった原田は、この突然の訪問をにべもなく拒絶してしまった。

この訪問は、ある悲しい出来事から、生きていく自信も頼りも一切失ったケイの最後の賭だった。

それを拒絶されて、ケイはその夜自殺した。原田の恋人になったのは「異人」のケイだったのだ。

ケイもまた「異人」であることを知った原田の心は迷った。彼女はそれを感知した。

「次元は違っても、愛の時間があつたのに、あなたはそれも壊してしまつた。」

原田への愛と憎しみに狂った「異人」は形相ものすごく迫つたが、間宮の機転で悲痛な叫びを残して消えていった。

一ヶ月の病院生活を終つて、原田は間宮と浅草の「両親」のアパートを訪ねた。そこはずっと以前から空地だった。2人は、花と線香を手向けた。

「綾子さんと結婚します。」という間宮の声を聞きながら、原田は静かな夏の日の不思議な体験を回想していた。

「ありがとう」と原田はそつと咳やいた。